

研究論文

グローバル化の中の教材土着化問題について

- 中国の日本語教材をめぐって

李 光貞*

I . 問題の提起

筆者は大学を卒業してから、一貫して日本語教育に従事し、日本語科の大学院生及び学部生向けの課程を多く担当している。長期に渡って日本語教育に携わる中で、時代や教材のバージョン、課程の違いによって多種多様な日本語教材を用いてきた。それに加え、日本語教材の編集にも携わってきたおかげで、外国語習得者にとっての教材内容の重要性を十分に認識している。周知の通り、国際的な動向を踏まえた教育理念として、レベルの高い複合型外国語人材を育成し、学生の実践能力・独自の思考能力を強化するために、外国語教育は読むこと・書くこと・聴力・会話にとどまってはいけない。大学の外国語科は、翻訳者を大量に生産する工場ではなく、学生に基本的な人文的知識を身に付けさせ、季羨林・王富恒・夏目漱石・大江健三郎のような東西にわたる学識、東西文化の教養を備える大学者を育成することを最終目標として目指すべきであると言えよう。従って、教材を選ぶ時、内容の意味や意義、学術的な視点や文化的な視点などを重要な要素として考慮しなければならない。

この意味でいえば、教材を作る際には、(外

国語教育の) 社会的意義や学生の発達段階を踏まえ、また、これまで学習してきた内容との関連を考えながら、なぜこれを教える必要があるのか、今後の学習とどのように繋がっていくのかという点を意識すべきである。さらに、自国について外国語で表現するに適した方法も考えなければならない。グローバル化が進む現在、外国語教育の土台である教材の編集及び選択の重要性はさらに高まっている。このような背景の中で、2011年、筆者が他の研究者と連携して行う日本語教材の土着化を研究対象にする「日本語教材土着化研究」という課題が、山東省社会科学基金に採択された。本課題の段階的な成果として拙文を提示し、専門家・研究者の方々のご意見、ご指摘を頂ければ幸いと思う。

II . 土着化の重要性再検討

1 . 「土着化」とは何であるか

土着化というのは一言でいえば、文化を導入する際に現れる価値の選択傾向である。日本語教材の土着化とは、日本語教材を編纂する際、中国の国情及び文化等の現実に沿いながら、中国語の言語環境や教材法に即応した教材の編纂が要求されるということである。それによって

* 中国山東師範大学外国語学院日本語学科教授

翻訳：王静（名古屋大学文学研究科博士後期課程）

本論文は山東省社会科学基金『日語教材土着化研究』（課題番号：11CWZJ44）研究項目の研究成果の一部である。

こそ、日本語教育において、学生に学んだことを活用させ、外国のものを中国のために生かし、さらに、国家建設のニーズに応える質の高い日本語人材、異文化コミュニケーションに長けた人材を育成することができるだろう。

2. 「和魂洋才」からの啓示

実のところ、長年にわたって、日本の外国語学界にしても、中国の外国語学界にしても、この問題についての研究を重んじてきた。田中克彦は『ことばと国家』において、言葉は社会性を帯びているので、国家、民族から切り離されると、言葉そのものにならないと言葉の政治性を指摘した¹⁾。確かに明治維新以来、日本は近代化を進めるなかで、西洋文化の土着化についての検討に取り組み、この問題に対する研究を怠ることはなかった。また、外国語教材を編纂する際も、日本の国情と結びつけることを重視している。以前、日本では、「和魂漢才」という言葉があり、それは、中国の学問を学びながらも日本の精神を失わないことを意味する。時代の変化によって、「和魂洋才」となったが、この明治時代の語は、和魂漢才をもじったものである。「和魂洋才」を体現する最も代表的な人物は、「国民作家」と言われる夏目漱石である。

ご存じのように、夏目漱石の「文学論」、「文学評論」は非常に有名な文学理論の本で、いずれも東京大学での講義が基になっている。1903年 - 1905年、夏目漱石は官費留学生としてイギリスで二年間の留学生生活を送っている。イギリスへ行く前の夏目漱石は実に「文学とは何か」という問題に悩んでいる。幼い頃から東洋文学を熱心に勉強し、特に、漢文学に関して優れた素養と知識に溢れていたのであるが、大学に入って、英文学を学んでみると、漢文学と英文

学とでは、同じ「文学」とはいても、それぞれの文学概念や定義などが異なっていることに気付いた。その問題に長らく疑問を持っていた夏目漱石にとって、英国での留学生生活は、文学の本質の探究、即ち自分が目指そうとしている「文学」とはそもそもどういうものであるかを問う機会であった。英国での留学生生活は苦しかったが、文学面の収穫が大きかった。

帰国後の夏目漱石は当時の東京帝国大学の講師となり、「文学概論」を担当するのである。夏目漱石の前任者はラフカディオ・ハーン(小泉八雲)で、非常に人気がある外国人教師であった。夏目漱石は当時の講義内容を英国で考えたものを中心として行い、論理的な一面でとても面白いものだと思われ、まもなく人気教師となった。その講義はのちに学生によって整理され、「文学論」、「文学評論」という名前で出版された。岩波書店から「文学論」を出版するときの紹介文が下記のとおりである。「その一九〇三年苦しいロンドン留学から帰国した漱石は帝大で教壇に立つ。後の文豪の世界文学との邂逅は近代日本に何をもたらしたか。一見難解な外観、歴大な引用、苦渋とユーモアの口調に漲る文学修行の精華。西洋と日本をつなぐ迫力満点の講義録。」²⁾現在振り返ってみても、夏目漱石の文学を生んだのはこの文学論以降ではなく、その講義は西洋文学を東洋文学とうまく結んでできあがった土着化の典型的なものである。夏目漱石は「和魂洋才」の代表人物と言っても過言ではなからう。

3. 外国語を勉強するのは何のためか

中国は1978年に改革開放政策に転じたあと、海外の先端的な教育理念及び原本の教材を導入し始めた。その過程で、(教材の導入に関して)原本をありのまま導入するのか、あるいは

両者の枠組みを生かすのか、またはどのように中国の国情と結びつけるのか等、いかにしてレベルの高いバイリンガル人材を育成することができるかが問われてきた。最初にそれらの問題に注目した英語学界は、たゆまずそれらの問題に取り組んできた。例えば、「英語の国際化と土着化」(文秋芳：『国外外語教学』、2003 .03)、『中国英語新聞用語の土着化』(俞希：南京大学出版社、2009)、「外来の幼児英語教材の土着化」(張玉梅：『学前教育研究』、2008 .06)、「地元文化を生かした外国語教育モデルについての探究」(蘆安：『外国教育与教学』、2009 .12)などが挙げられる。

中国において日本語科は英語科とロシア語科と比べれば、新興学科のほうであるが、発展が迅速で、この外国語教材土着化分野に関連する研究もすでに現れている。CNKI(中国学術情報データベース)で「日本語教育 土着化」をキーワードにして検索すると、少なくとも2篇の論文(呉大綱：「動詞の意味についての中日比較研究 日本語教育の土着化問題を探究」、『日語学習と研究』2010 .01;董敏芳：「日本語精読原典教材の土着化教育法研究」、『蘇州教育学院学报』、2006 .04)が表示されている。論文は少ないが、当該問題は既に日本語研究学界に重視されていることが分かる。一方、それらの論文は題目の通り、日本語教育のある面あるいはある段階だけを扱い、量も少ないため、日本語教材の土着化に関する体系的な研究成果を挙げるところにまで及んでいない。

もう一つの側面として、二十一世紀に入ると、グローバル化の波の中で、多くの発展途上国は、自国の文化と価値体系を強化する非西洋型の発展モデルを採用することの必要性を深く認識している。例えば、シンガポールの前首相である李光耀とマハティールは、「アジア的価値論」を提唱さえし、それによって、西洋文化との差異を主張し、最終的に自国の文化及び価値体系に根ざす非西洋型の発展モデルを作ろうとすることを表明した。日本語教育は中国の外国語教育における重要な構成部分として、グローバル化の流れの中でいかに中国なりの土着化を実施するかという問題をも抱えている。統計によると、現在中国全国において、日本語科を設立した大学は466校になり(2012 .04まで)、山東省にある51校の全日制度大学の中に、日本語科を設立した学校は36校に達した。高等職業技術学院などにおける日本語科を加えると、その数はさらに膨大である。これほどたくさんの日本語学習者が日本語を勉強するのは何ゆえであるか。答えは一つではない。「人と世界とのかわり方をことばにおいてみるということであろう。人は世界をことばによって意味づける。意味を生産する。その意味を人に伝える」³⁾と尾上圭介が指摘したように、確かにことばによって、人は自分の心に内在するものを発散し、表現し、そこに伝達が成立する。英語学科に次ぐ第二の外国語科としての日本語科はいかにして日本語教材の土着化を実現し、国家建設のため多くの日本語人材を提供するかどうかだけでなく、高い異文化コミュニケーション能力を持つ人材を育成することが重要かつ緊急な課題となっている。

値論」を提唱さえし、それによって、西洋文化との差異を主張し、最終的に自国の文化及び価値体系に根ざす非西洋型の発展モデルを作ろうとすることを表明した。日本語教育は中国の外国語教育における重要な構成部分として、グローバル化の流れの中でいかに中国なりの土着化を実施するかという問題をも抱えている。統計によると、現在中国全国において、日本語科を設立した大学は466校になり(2012 .04まで)、山東省にある51校の全日制度大学の中に、日本語科を設立した学校は36校に達した。高等職業技術学院などにおける日本語科を加えると、その数はさらに膨大である。これほどたくさんの日本語学習者が日本語を勉強するのは何ゆえであるか。答えは一つではない。「人と世界とのかわり方をことばにおいてみるということであろう。人は世界をことばによって意味づける。意味を生産する。その意味を人に伝える」³⁾と尾上圭介が指摘したように、確かにことばによって、人は自分の心に内在するものを発散し、表現し、そこに伝達が成立する。英語学科に次ぐ第二の外国語科としての日本語科はいかにして日本語教材の土着化を実現し、国家建設のため多くの日本語人材を提供するかどうかだけでなく、高い異文化コミュニケーション能力を持つ人材を育成することが重要かつ緊急な課題となっている。

Ⅲ．中国における日本語教材の現状

1．日本語教材の内容構成分析

現在中国の大学で使っている日本語科の精読、講読、会話、ヒアリングなどを含む、初級日本語から上級日本語まで85種類の教材を筆者が調査したところ、直接に日本語原典から選定され、そのイデオロギーを反映している文章が

大きな割合を占めていることが分かった。その中で、中国の社会や生活を対象として編集された本文もあるが、その殆どは初級レベルに属する。高学年の場合は、上級の日本語教材になればなるほど、その教材の本文内容はほぼすべて日本語原典から採用され、日本語で中国本土の文化や社会や伝統などを紹介するものは極めて少なくなることがわかっている。

例えば、『日本語精読(2)』(外語教学与研究出版社)は大変優れた教材であり、その中の本文は段階を踏んで展開し、適切な構成、豊富なジャンルを持ちつつ、日本文化の様々な面に触れている。文章の選定について、その本には「本教材の文章を選定する際、一部分は日本語原典を採用した。それと同時に、必要に応じて一部の文章に修正や編集を行った。(中略)テキストの学習を通して、学習者に日本語の特性をより深く理解させるとともに、日本文化及び現在の日本社会の現象を更に認識させることができる」⁴⁾と書いてある。編集者が自分で編集した本文がかなりの比重を占めている。

- 第一課 いただきます。
- 第二課 “なんにもごさいません”の日本文化
- 第三課 外国語を学ぶコツ
- 第四課 なんにより健康
- 第五課 ボランティアの意味
- 第六課 あなたは算盤を捨てますか。
- 第七課 地震
- 第八課 日本人の食事
- 第九課 携帯電話
- 第十課 歌舞伎
- 第十一課 着物について
- 第十二課 身振り言語
- 第十三課 今、日本の家は
- 第十四課 ボランティア 年記者ホームの秋祭り

- 第十五課 幽霊・妖怪・お化け
- 第十六課 聴耳頭巾
- 第十七課 大学とは
- 第十八課 「癒し」「和み」ばやり
- 第十九課 新聞コラム
- 第二十課 二十一世紀を生きる

本文の内容、構成から見れば確かにすべてがそのまま日本語原文を引用したものではないが、中国に関する本文は一篇もないのも事実である。

もう一つの例である。『日語総合教程(7)』(上海外語教育出版社2007年)⁵⁾もとても素晴らしい教材である。学習対象は大学四年の第一学期で、学部生時最後のテキストである。内容構成は以下の通りである。

- 第一課 二つの川のほとりで
- 第二課 辛夷の花
- 第三課 ナイン
- 第四課 わたしの夏 1945年・広島
- 第五課 みやこ人と都会人
- 第六課 自然と人間
- 第七課 城の崎にて
- 第八課 案内者
- 第九課 手作り幻想
- 第十課 徒然草

これらの本文はすべて日本語の原文で、読む価値が非常に高い名作である。しかし、あるいは、日本語で書かれた中国の社会や文化などの本文を一篇でも加えることができれば、さらに効果的ではなからうか。学生が日本人のものの考え方と美の受け止め方を学ぶとともに、自国の伝統的なものを一緒に学ぶことを通して、両国国民の精神生活を体験させるのである。

実のところ、長年にわたって、教材の編纂をめぐり、いかに原典の素材を扱うかについて議論が続けられてきた。いずれもその合理的な一

面を持っているが、大事なのは中国の特別な言語教育環境及び文化に適應できるかどうかを判断することである。言語を場として人と世界と意味の関係を考えさせるために、両国の文化などに触れ、相互理解に貢献できれば何よりである。

2. 言語以外のもの

外国語科の学科特徴からいえば、言葉の勉強が学問内容のすべてではない。勿論、会話能力は非常に重要であるが、ことばの奥に潜んでいるものを探ることはさらに重要であろう。例えば、日本人は初対面の時「初めまして、どうぞよろしくお願いたします」というのがかなり普通であるが、そう言わないと、失礼だと思われがちである。しかし、アメリカでは初対面でも、「Hello」だけいえばいいのである。これはなぜかと言うと、アメリカの文化は「横」の文化と言われるのに対して、日本の文化は「縦」の文化であるためだ。これに対して、中根千枝はこう述べた。「日本人にとっての個体認識としての社会学単位は、欧米人のように個人ではなく、確かに集団である」⁶⁾。「縦」文化の主な表現の一つは「内」、「外」の区別があり、初対面の人は「外」の人なので、「よろしく」というのである。言葉は文化を伝えるものであると同時に、文化の一部でもある。だからこそ、教材を作る時、これをあわせて考慮すべきである。

実は、いかにして外国語原典の教材をバランスよく取り入れるか、またいかにして自国の伝統文化を（教材に）反映させるかが、外国語教育の内容の位置付けに繋がっている。大学の日本語科の学生を、日本語塾で日本語を習得する学生と同一視してはいけない。日本語教材には、規範的な日本語に基づきながら、中国の社

会、文化などの分野における特有の現象や物事を表現する文章を加える必要がある。それこそ、学生が中国文化と海外文化の両方から滋養を受け入れるために有効であろう。異文化コミュニケーション学の視点から見ても、それは学生と相手側との効果的な交流と理解にも有益であると思われる。他国の文化を学ぶにあたっては、何でもその国の文化を模倣し取り入れるだけにとどまってはならない。自国文化への理解が基礎にあつてこそ、互いの理解はさらに深くなるのである。

IV. 土着化における注意すべき問題点

確かに、先述したように、言葉は文化の担い手でありながら、文化の一部でもある。この点から見れば、日本語教材の土着化は、土着化した日本語人材を育成するには深遠な意義を持っている。具体的に言えば、日本語教材を編纂する際、以下の三つの問題に注意しなければならない。

1. 文化を重んじること

交通機関の発達と情報技術の急速な進歩によって地球はどんどん狭くなっている。一方では、国境という政治的な壁が低くなり、人・物・情報・金銭が大量に動き回るようになった。とはいっても、文化の違いを超えるのは難しい。日本語教材を考える場合、「人々が異文化間コミュニケーションを通して、多くのことを学ぶための学び方を学ぶ」⁷⁾という役割があると考えるべきである。教材を編纂する際にはその旨を頭に入れながら、中国と外国の教育理論を適切に扱うべきであると同時に、中国の言語教育環境に応じた特性及び具体的な状況も無視してはいけない。限られた時間内で詳しく説明を尽

くすことは難しいが、少なくとも、啓示的に学生を了解させる。例えば、「日清戦争」という言葉は日本語の表現であるのに対して、中国語では「甲午戦争」というのである。「わび」「さび」ということばは日本文化の背景を離れては解釈できない。

日本では「和洋折衷」という言葉があり、その意味は「日本風と西洋風とをほどよく取り合わせて用いること」⁸⁾のように、教材を作る際には、中国における日本語教育の現場と結びつけ、その中の具体的な問題を分析し、教育の対象、目的及び要求に応じて、中国の国情に即する教材を編集すべきである。即ち、海外の外国語教育理論が進んでいることは確かであるが、それによって中国の日本語教育におけるあらゆる問題を解決する唯一の根拠とは限らないと言えよう。

2. 母語の学習の重要性

教材の編纂にあたっては、中国の国情と外国の文化及びビデオロジーをバランスよく扱うべきである。現在、外国語の習得時、学習者が抱えている深刻な問題として、まず挙げられるのは、大部分の人は、外国語を自分の母語(中国語)より重要視する点である。また、原典である教材に従わなければ本場の外国語を身に付けられないという認識もある。従って、日本語教材を編纂する際、自国の社会価値及び文化伝統を伝える文章を重要視しなければならないと言えよう。それこそ自国の社会発展を決定する根本的な要素だからである。自国の(歴史・社会・文化・言葉について)知識を持たない人が、はたしてどれほど異文化を理解できるのかは疑問である。

学生に規範的な日本語を身につけさせるとともに、伝統文化の修得を疎かにしてはいけな

ことを教え、更に中国の国情に合致する日本語教材の新たな編纂方法を見出すことが肝要である。

V. 結論

明治時代の夏目漱石は、外発的な「近代化」に直面し、それを「皮相上滑りの開化」として批判的に捉えていた。二十一世紀の今日、100年以上も前のその批判はやはり有意義である。

「言語教育の使命は、異文化コミュニケーション能力を育てることによって、人類に貢献することにある」⁹⁾。これまで学習してきた内容との連携や、今後の学習とのつながりを意識しつつ、各方面からの経験を学び、さらに国内外の教材編纂理論及び原典の素材を適切に扱いながら、自分なりの土着化した教材、即ち、自国の特色のある日本語教材を編纂する新たな道を拓くことが今こそ急務である。出版社の専門家と教材編集者、また教育現場の教師たちがともに努力することで、日本語教育と日本学の研究の、今後の更なる発展を促進することができるのである。

注

- 1) 田中克彦著：ことばと国家。日本岩波書店，1981年版。第19～24頁。
- 2) <http://cache.yahoofs.jp/search/cache?c=XaoIMjEdYKcJ&p>
- 3) 尾上圭介：現代日語語言学前沿・何のための言語研究か。外語教学与研究出版社，2010年版。第4頁。
- 4) 《日语精读第二册》，外语教学与研究出版社，2006年版。原文：在选编本册教材课文时，采用了部分日本原典。同时，根据需要对部分文章进行了改写，并编写了一些课文。……通过对课文内容的学习，可以使学习者对日语的某些特性有更加深刻的理解，同时，还可以使之对日本文化和当今日本社会的某些现象有进一步的了解。
- 5) 《新世纪高等学校日语专业本科生系列教材-日语综合教程(第7册)》，上海外语教育出版社2007年版。原文：课文选篇均为名家名篇，内容涉及日本社会、经

济、文化、文学、风俗习惯及科普知识。语言表达规范，遣词造句丰富优美，可读性强。课文的难易程度安排合理，符合循序渐进的教学要求。

6) 中根千枝：タテ社会の力学。講談社，1987年版。第21頁。

7) 青木直子等：日本語教育学を学ぶ人のために。世界思想社，2003年版。第198頁。

8) デジタル大和泉の解説。

9) 青木直子等：日本語教育学を学ぶ人のために。世界思想社，2003年版。第3頁。

参考文献

田中克彦著：ことばと国家。日本岩波書店，1981年版。

青木直子等：日本語教育学を学ぶ人のために。世界思想社，2003年版。

中根千枝著：タテ社会の力学。講談社，1987年版。

柴田庄一著：夏目漱石と日本の近代。言語文化論集。2009年第1号。

潘均主編：現代日語語言学前沿。外語教学与研究出版社，2010年版。

宿久高主編：《日语精读第二册》。外语教学与研究出版社，2006年版。

季林根主編：《新世纪高等学校日语专业本科生系列教材-日语综合教程(第7册)》。上海外语教育出版社，2007年版。